

## 業界短信 (24年10月～11月)

### インスマタル、屋根修理工事が完了（産業新聞、10/4）

㈱インスマタル（浦安市、福井英人社長）はこのほど、千葉営業所・八街工場の屋根修理工事を完了した。老朽化が目立っていたため、年内に外壁及び看板の修理工事も行う。同工場は、93年にレーザ専門工場として開設。産機向けなどを中心に、本社・浦安工場の仕事などをこなしているほか、地場の取引先を開拓。板厚32ミリまで対応可能なほか、3次元加工機などレーザ4台体制で、月間200～300トンを切断している。このほか、昨年開設したレーザ溶接センターも順調に稼働しており、初年度から黒字を達成している。今年と同社創業50周年の節目の年でもあり、工場建屋を刷新する。

### 太陽シャーリング、アートギャラリーの展示充実（産業新聞、10/9）

太陽シャーリング㈱（広島市、浅利重法社長）は、本社事業所の3階部分を利用して開設しているアートギャラリーの展示を充実させた。ギャラリーは昨年8月に開設。同社の横溝政志・前社長が描いた絵画や、彩色魚拓とともに、本年度から新たに写真の展示も開始。会社設立時から現工場建設、設備の増設など同社の歴史を当時の写真とともに振り返るコーナーも設けた。また、社内行事の様子も写した写真も多数掲示している。現在は今年2月の鹿児島への社内旅行と8月に開催した「安全決起焼肉大会」の様子を紹介している。ギャラリーは商談に訪れた取引先にも見学してもらっており好評を得ている。

### 藤田金属、長岡にレーザ機新設（産業新聞、10/9）

藤田金属㈱（新潟市中央区、今井幹文社長）は、長岡支店にレーザーセンターを開設して、レーザ切断機を新設するとともに、燕市の県央レーザーセンターで設備の更新を行った。総投資額は合わせて約2億円。これにより、同社の県内レーザーセンターは、新潟市内の工場を含む3拠点体制で、ユーザーニーズにきめ細かく対応してゆく。

### 飯塚鉄鋼、鋼材センターを拡張（産業新聞、10/11）

㈱飯塚鉄鋼（姫路市、岩城正治社長）は先月20日から、鋼材センターの拡張工事を開始した。既存建屋の隣接地に倉庫棟を建設するもので、完成は11月末。完成後、拡張部分には切板用の母材を在庫する予定で、センターの在庫保管能力は現状比5000トンの7000トン体制になる見込み。同社は、本社工場にプラズマ、レーザ、NC溶断機など各種加工機を多数持ち、建機、産業機械、重電、造船関連向けなどに切板・開先加工を行っている。

### 中部鋼板・本社工場、周辺環境対策を強化（鉄鋼新聞、10/19）

中部鋼板㈱（名古屋市中川区、太田雅晴社長）では、周辺環境に配慮した工場づくりの取り組みが進展している。周辺の市街化が進む本社工場では、騒音、振動の監視施設を今期中に増設計画のほか、環境パトロール、太陽光発電事業への参画などを進めている。また、近隣住民を対象にした説明会や工場見学会も毎年実施し、理解を深めている。同社では先週、近隣住民を対象とした工場見学会と環境対策の取り組みに関する説明会を開催。近隣の複数の町内会役員など約30名が参加した。付近住民に理解してもらうことを目的に、2007年から継続実施しているもの。騒音、振動を監視する施設も年度内に増設してゆく計画のほか、太田社長が陣頭で状況を確認する環境パトロールにも力を入れてゆく方針だ。また、建屋の耐震性能向上策も順次展開する。

### 村山鋼材、独自商品拡販、月1万5000トンへ（鉄鋼新聞、10/19）

村山鋼材㈱（東京都大田区、村山和雄社長）は、10月からスタートした今61期の厚中板販売量について前期実績見込み比約10%増の月間1万5千トンを目指す。製販一体による販売体制を武器に、オリジナル商品の「レーザ切断用鋼板」の拡販に注力。特に自販比率の拡充を推し進め、中小規模のエンドユーザー向け新規開拓を強化する。自販は同30%増の月間3千トンが目標。

### 松田商工、円錐曲げ専用機導入（産業新聞、11/2）

㈱松田商工（浦安市、松田学社長）は、来年3月を目処に、円錐曲げ専用機を1基導入する。これまで円錐ホッパーは半円錐形状の2つの部材をセットにして供給してきたが、これを最終製品に近い円錐タイプ一つで供給できる。また、極厚曲げに再度注力しているほか、年内を目処にステンレスの曲げ加工に乗り出したい考えで、2次加工比率を現在の40%から50%に引き上げる。

### ミュキ鋼材・結城事業所、レーザ3台体制に拡充（鉄鋼新聞、11/13）

ミュキ鋼材㈱（川崎市川崎区、小林茂社長）は、結城事業所の厚中板一次加工態勢を一新する。最新鋭の大型レーザ3台を、今秋から来年末にかけて段階的に新設・更新。すでに1台は10月末に操業を開始した。切板のロットが細くなり、枚数は増加。しかも形状や単重が小さくなる傾向にある。シビアな穴あけ真円精度も要求され、こうした注文にはレーザ切断の特性が生かせることから、従来の2台から3台体制とする。これに先駆け、大型プラズマ切断機を撤去。空きスペースを材料置き場として活用することで、配換え作業の効率化・スピードアップはもちろん、母材と端材、規格ごとといった厳格管理も行えるようになった。受注内容に応じて最適設備を選択し、最大効果に繋がる高効率加工体制と構内物流を順次、整えていくことになる。

### 菰下鋳断、矯正プレス更新（鉄鋼新聞、11/21）

㈱菰下鋳断（大阪府、菰下千代美社長）は来期（14年3月期）投資として来年度夏予定で1千トンヒズミ矯正プレスを更新する。既存矯正プレス機は稼働から約40年が経

過しているため老朽化に対応する。同社の月産量は約 3 千ト。本社及び第 2 工場のほか北陸事業所、玉野事業所がある。前期は昨年 3 月にレーザ溶断専用の本社第 2 工場を新設。今期は小ロット化対応などを狙って本社工場に小型ガス溶断設備を増設し、更に老朽化対応のために大型ガス溶断設備も更新した。同社は老朽化対応のほか、近年若返りが進んだことから「人材育成」に注力。菰下社長は「厳しい環境の中で臨機応変に対応していける人材を育てていきたい」と話す。